

2025 年 6 月に本学会より「胃がん検診のための胃 X 線検査マニュアル 2025 改訂第 3 版」が発行された。このマニュアルは 2005 年に発行された「新・胃 X 線撮影法（間接・直接）ガイドライン」および 2011 年に発行された「新・胃 X 線撮影法ガイドライン改訂版（2011 年）」に次ぐ第 3 版となる。また名称はガイドラインからマニュアルに変更された。

内容は 3 部構成となっており、各部の概要と従来のガイドラインからの改訂ポイントは以下のとおりである。

第 1 部の胃がん検診のための胃 X 線検査の撮影法と精度管理 では撮影法の名称が対策型検診撮影法および任意型検診撮影法がそれぞれ基準撮影法 I、基準撮影法 II に変更になった。

この基準撮影法は、NPO 法人日本消化器がん検診精度管理評価機構（以下 NPO）が 2009 年から長い期間をかけて全国に普及してきた撮影法である基準撮影法 1、2 とほぼ同じである。違いはバリウム濃度と量についてであるが、NPO の値を推奨値としている。本文では撮影手順について、時系列に詳しく説明されており、各体位の X 線画像に対比して標的部位が図示されていて理解しやすい構成となっている。これから胃 X 線検査に携わる方にはもちろん、経験を積まれている方にも技術の再確認に適している。まさに優れた“マニュアル”である。

第 2 部の胃 X 線検査における医療被ばくと偶発症 では、今回新たに策定した DRL について胃 X 線検診における考え方と本学会胃 X 線検診における DRL（診断参考レベル）策定小委員会の調査結果を掲載した。

この DRL 値を目標として、各施設で適正線量になるよう心掛けていただきたい。特に胃 X 線検査では透視線量が被ばくの多くを占めているので FPD 装置ではパルス透視の活用等を検討いただきたい。

第 3 部の胃 X 線検診の実施手順と精度管理～対策型胃がん検診を中心に～ では、胃 X 線検診の計画から実施、精度管理に至るまでの広範囲の説明がされていて、胃 X 線検診の全体像を理解できる。また、胃 X 線検診における放射線技師の役割を理解するうえで重要な内容である。

以上のことから、このマニュアルは胃がん検診専門技師を目指す方はもちろん、この専門技師の資格更新にあたって知識のアップデートに必須のマニュアルである。